

2021. 8. 8 (日) マタイ26:36~46

26:36 それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという場所に来て、彼らに「わたしがあそこに行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。

26:37 そして、ペテロとゼベダイの子二人と一緒に連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。

26:38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」

26:39 それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」

26:40 それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らが眠っているのを見、ペテロに言われた。「あなたがたはこのように、一時間でも、わたしとともに目を覚ましていられなかったのですか。」

26:41 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

26:42 イエスは再び二度目に離れて行って、「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と祈られた。

26:43 イエスが再び戻ってご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。

26:44 イエスは、彼らを残して再び離れて行き、もう一度同じことばで三度目の祈りをされた。

26:45 それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。」

26:46 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」

<説教>

「ゲツセマネ」はオリーブ山の麓にあり、ガト（しぼる）＋シエマネ（油）という名前の由来から分かるようにオリーブの油を搾る作業場があった場所と考えられています。

主イエスはそこでオリーブ油ではなく、血のしずくのように地に落ちる（ルカ 22:44）ほどご自分の汗を搾り出すようにして一人でご自分の父なる神に祈られました。

「わたしがあそこに行って祈っている間、ここに座っていなさい」とイエスは弟子たちにお命じになりました（26:36）。

更にその弟子たちの中から〈ペテロとゼベダイの子二人と一緒に連れて行かれ〉、彼らの前で〈イエスは悲しみもだえ始められ〉ました（37）。

そして「わたしは（直訳「わたしのたましいは」）悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」とイエスは彼らに言われました（38）。

イエスはかつてこの三人にピリポ・カイザリヤのヘルモン山（と考えられる）でご自分の栄光の姿をお見せになりましたが、今度は〈悲しみもだえ〉る姿をお見せになりました。

この三人の弟子たちの前だけでなく、イエスはそれまで多くの人々の病を癒やし、悪

霊を追い出し、死人をよみがえらせ、湖の風をも治め、大群衆にパンを食べさせ、敵対する律法学者やパリサイ人たちをも力強く論破して来られ、要するにいつも強いお方でした。

それで、人々は（弟子たちも含めて）イエスがいつかローマ帝国の支配を打ち破ってユダヤ人の国を再び興してくださると期待していたのでした。

しかしこのときイエスは、それまで見せたことのない弱さを、単なる弱さではなく究極の最高の、〈死ぬほど〉の弱さを隠すことなく三人の弟子たちにはお見せになったのです。

そんな〈悲しみ〉、〈もだえ〉、たましいが〈死ぬほど〉の〈悲しみ〉とは何だったのでしょうか、その理由は何だったのでしょうか。

続けてこう書かれています。

〈それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」〉(39)

イエスが「わたしから過ぎ去らせてください」と言われた「この杯」とは何か。

それは私たち人間の罪に対する神の怒り、のろいであり、からだたましいに与えられる審判のことです。

すぐ前の過越の食事のときにイエスが「飲みなさい」と弟子たちにお与えになった「杯」は「多くの人たちのために、罪の赦しのために流される、わたしの血、契約の血」だとイエスは言っておられました。

私たち人間の罪の赦しのためには罪なき神の子羊イエスの血が十字架で流されなければならず、またその十字架の上でイエスが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた(27:46)ように、神の御子が父なる神から捨てられなければなりません。

本来私たち(数え切れない多くの)人間が自らのからだたましいで受けるべき神の怒り、のろい、審判(つまり飲むべき「杯」)をイエスが私たちのために、私たちに代わってお一人でその身に負って受けなければならなかったのです。

そのためにこそイエスはこの世に来てくださったのですが、今その実現を目前にしたとき、確かにイエスのたましいは〈死ぬほど〉〈悲しみ〉〈もだえ〉られたのです。

イエスはその日十字架で〈死ぬほど〉(実際に死なれた)の痛み苦しみ〈悲しみ〉〈もだえ〉を受けられるのですが、その前にゲツセマネでたましいに〈死ぬほど〉の痛み苦しみ〈悲しみ〉〈もだえ〉をまず経験されたのです。

私たちの罪の赦し、贖いは、それほどの痛み苦しみ〈悲しみ〉〈もだえ〉を私たちのために、私たちと同じ弱い人間として、しかし罪無き人間として経験し、味わってくださいましたお方イエス・キリストお一人に懸かっているのです。

「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」(39)とは人間の罪に対する神の怒り、さばきを知った正真正銘の人間の正直な祈りと言えます。

「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」とイエスのご自分の意思を神の御意思に喜んで従わせる祈りを〈ひれ伏して〉捧げました。

「みこころなら」と言うことの中身が「いくら祈っても駄目なら仕方ない、諦めます」程度の私たちが考えそうな見せかけの渋々の従順の祈りとは違います。

ですから二度目の祈り、「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないので

あれば、みこころがなりますように」(42)とは、「わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのですから、わが父よ、あなたのみこころがなりますように」ということです。

「みこころがなりますように」とは「主の祈り」(6:10)と全く同じ言葉です。

自分の願いを正直率直に申し上げつつ、喜んで最善最高なる神の御意思に喜んで自分の意思を従わせるのが信仰の従順による祈りです。

〈キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源とな)られた(ヘブル 5:7-9)とはこのイエスのゲツセマネの祈りを覚えて書かれたに違いありません。

「一時間でも、わたしとともに目を覚ましていられなかった」(40)、「**霊は燃えていても肉は弱い**」(41)弟子たちの姿については正に自分のことだとその弱さと限界を認め、主の前に日々悔い改めて行くほかありません。

イエスは私たちのために「人間と同じようになられ」(ピリピ 2:7)、私たちのために弱くなってください、その弱さにゲツセマネの祈りにおいて勝利し、弱さを克服し、たましいの〈死ぬほど〉の〈悲しみ〉〈もだえ〉に打ち勝ってくださいました。

イエスは弟子たちにご自分の勝利を分け与え、勝利に与らせてくださるのです。

そのイエスが弟子たちのところに来て、「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」(45,46)と言われました。

私たちはこのイエスのみことばに、イエスの祈りに、イエスの信仰と従順の姿に目を向ける必要があります。

〈死ぬほど〉(実際に死ぬ)の痛み苦しみの〈悲しみ〉〈もだえ〉を永遠に受けるに値する罪人である私たちは、このイエス・キリストの故にそれから免れさせていただくのです。